

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 47

2016. 12. 25発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第47回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『サボテンのまち春日井の源流』

～実生サボテン日本一への苦闘～

平成28年12月4日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『ふるさと春日井「サボテン」で「地域活性化」』で設定致しました。

春日井市の特産品として、サボテンの実生栽培は全国シェア80パーセントとされています。「サボテン」のまち春日井として、全国に発信しています。商工会議所を中心にしてブランド化の推進、シェア拡大のためのマーケティング、商品開発と頑張っておられます。しかし、草創期の歴史については市民の間にどれほど認識が定着しているだろうか？現状と今後の展望を考える上で「サボテンのまち春日井」と言われるようになった源流と草創期の歴史を知らなければならぬと考えました。本物の「実生サボテン」専業生産農家の伊藤サボテン園の創業者伊藤龍次さんの苦闘の歴史をお話しして頂きました。

講師は、伊藤安季子氏です。参加者は17名でした。



中日新聞記事（平成28年12月6日）



講演：伊藤安季子 氏



会場風景

－発表要旨－

「実生サボテン日本一」という標語が浸透しているのかかわらず、そのサボテン生産業者は後藤サボテン園しか知らないというのが春日井市民の実態だと気付く。そこで、本物の「実生サボテン」専業生産農家の伊藤サボテン園を知ってもらおうと、今回、**伊藤龍次**さんの偉大な功績と、それを受け継ぐ長男夫婦を紹介する場を設けた。長男夫婦とは**伊藤直毅**さんとその妻**安季子**さんである。人前に出るのが苦手な直毅さんに代わる形で、サボテン生産農家に嫁いで 40 年の安季子さんに、勇気をもって講演をしていただくことにした。「広報・営業担当は私です」と快く引き受けていただいた。最初に提供いただいた資料は「広報かすがい」で 1994(平成 6)年 5 月 1 日号であった。なかなか記録資料や写真など映像資料がなかったにもかかわらず、引き受けられてから、いろいろ出てきた。創業者の伊藤龍次氏は大正 12 亥(1923)年 7 月 28 日生まれ。「広報かすがい」に「これが春日井の日本一」の特集(5 頁)が組まれて 2 年後、73 歳で亡くなられている。

I. 安季子さんの実家もサボテン栽培、長野県南安曇野で中高時代から栽培と販売に携わる



信州のサボテン栽培は春日井より古くから行われていたという。昭和 42 年ころを境に景気は下降。信州でも新しいことを始めないと、珍品・奇品を求めて繁殖させてもうまくいかない中で、愛知から来られた方と話す中で、輸出に目を向けきりぬけようと、春日井の桃山から苗を買い付けて挑戦した。他県でも桃山から仕入れ、輸出向けはさほど悪くないと知っていた。安季子さんの兄は、春日井の桃山にある伊藤龍次さんの弟邦之さんの下で 5 年間の研修を積んだ。その縁で直毅さんと結婚。すでに 40 年になる。夫の体調のこと

もあって、「営業と広報」は安季子さんが担当してきた。

II. 実生栽培の成功で、高価なサボテンを大衆化した

(1) 伊藤龍次氏は大正 12 年生まれ。昭和初期に、まだ田楽原(ばら)と呼ばれた桃山に、開拓で父に連れられてきた。この地域は、開墾で、明治中頃から桃が花をつけ、大正中頃には桃は軌道に乗っていた。明治末に富有柿、昭和の初

めにリンゴ栽培が始まった。関戸銀二が始め、龍次の父も同時期、3 町余の開墾をし、リンゴの木を植えたのが昭和 10 年。この頃が広がった時期だ。龍次はそれを手伝っていた。その後、各果樹園の一角でサボテンが育てられていくことになる。

(2) 龍次は、昭和 26 年に小牧の友人から実生をわけてもらい、趣味でサボテン栽培を始めた。戦後にわずかに残ったサボテンの苗を探し蒐集する。昭和 27 年だ。長野にも買いに出た。果樹農家の龍次は、もともと接ぎ木が得意だった。野菜を種から育てるのも日常であっ



サボテン界に大革命をもたらした



- 1990年8月発行の「日本サボテン史」に見出しの表現が載る
- 世界の実生を制覇した桃山の黒関氏は昭和28年である
- 桃山の総師伊藤竜次氏とサボテンとの出会いを取り持ったのは小叔の**直毅**、そこには銘品、奇品が揃っていた
- 銘品の美しさに感銘を受け、**関戸貫一**氏と共にサボテン生産の道に入った

生産が軌道に乗ったのは昭和30年頃
数年後に**伊藤邦之**、伊勢湾台風後に**伊藤隆之**が加わった



- 伊藤兄弟に続いて、**坂田孝**、**竹葉城**、**伊藤誠**、**後藤武雄**、**関戸貫一**が実生栽培を開始した
- 伊藤兄弟と関戸氏の傘下に、**伊藤**、**安田**、**西尾**、**土田**、**神田**、**鈴木**、**長江**、**大鷹**、**尾頭**、**神戸**、**山田**の各氏が実証場として系列化

家は現金を得る。戻されたものが全国に出荷される。長野・静岡・岐阜・群馬などのサボテン農家である。自分で実生から始めればよそさうだが、なかなか自分ではできないから春日井の桃山まで買いに来る。国内出荷は約 2 割で最盛期とさほど変わらない。輸出が少なくなった分、売り上げが落ちているのが実態とか。

㊦写真は邦之の子日出雄氏

(4) 桃の生産で開拓民の生活を大きく変えていったことから昭和 23 年に「桃山」の地名がつけられることになった。その桃山でサボテンを始めたのは伊藤龍次さんと関戸貫一さんだった。関戸さんは龍次さんの 12 歳年上。施設の費用の節約と効率のよさを求めて三角屋根のガラス温室を開発した。発芽率の悪いのは細菌のせいだと消毒を考案したが、箱から漏れた種が発芽しているのを見つけ、消毒をやめた。ずいぶん効率がよくなった。三角温室や消毒のことは見て育った、龍次の長男直毅さんも年若ながら、それを見ており、消毒なしで育てたことも自慢だ。関戸さんは春日井市にサボテンを寄付するなど精力的に桃山のサボテンの宣伝に努めたが、早くにサボテンから手を引いてしまったので、龍次さんと、その第二子、次男の邦之さんと 6 男の隆之さんが実生栽培を担ってきた。輸出が桃山のサボテンを支える

サボテン温室、右が実生育成箱



た。このことが、後のサボテンの実生栽培、台木に緋牡丹を接ぎ木する技術につながった。父の反対を押し切って生業としての道を歩む。説得に 1 年かかった。

(3) サボテンの種の発芽率が悪く、苦労したという。全滅したこともあった。海外から輸入した種が古かったのか、大損したが、同じところに発注を続けていたところ、そのうち発芽率はよくなった。相手がいいものを送ってくれるようになった。信用されてきたのだ。講演会場で 2 種類の種をみせてもらった。実に細かい種で細かい金洋丸は 5~6 万粒、ヘルテリは 1 万粒入っていた。佃煮箱と呼ぶ木箱に二千から千粒を蒔く。小さな粒が動かないように、箱を水に浮かべる。1-2 週間で発芽するが発芽率は通常 65%程度。約 6 か月で移植をし、1 箱 500 本にする。これを 2 次生産農家に育苗を委託する。約 1 年後に 1 次生産農家に戻し、この時に 2 次生産農

る中で、直毅・安季子夫妻は西ドイツ・オランダ・韓国など海外でのサボテン栽培の実態を研究する旅行に出た。講演会場の机の上に、その時のアルバムが置かれていた。全盛期の新聞切り抜き帳も机の上に並べられていた。

龍次氏の 6 男**伊藤隆之**氏は「赤味の冴える緋牡丹」の開発者であった。緋牡丹の最初の作出

者は渡辺栄次だが、藤沢に転居後、昭和 36 年に他界。まだ、赤味は薄かった。隆之氏は非常に器用な人で、その赤味をほれほれする緋色にすることに成功した。数万円だったものが数百円で庶民に届く。スライドの直毅・安季子夫妻のバックに貼られたポスターの緋牡丹はその緋色で、伊藤家にとって誇りの作品である。ポスター製作者はそのことを知らないで使

春日井が実生サボテン生産日本一という誇りはここから始まる



っている。

Ⅲ.春日井の「実生サボテン日本一」の本当の意味は「サボテン界に大革命をもたらした」こと

『日本サボテン史』(1990、日本カクタス専門家連盟)では、「サボテン界に大革命をもたらした」と賛辞をおくる。「世界の実生を制覇した桃山」の幕開けは昭和 28 年と紹介されている。

会場には、直前に出てきた昭和 42 年 NHK ラジオ「農民群像～サボテングループ」台本が並べられて

いた。技術革新に取り組む本髄が語られている。世界制覇の感動秘話である。

(記録：塚田 忠雄)

OPINION

『ふるさと春日井「まちづくり」の風景』

—実生サボテン栽培の草分け伊藤龍次と企業家精神—

春日井市は、「まちづくり」の柱の一つとして「サボテンのまち春日井」の標語を掲げています。しかし、市民の意識の中にどれほど「サボテン」が受け入れられているのかという視点でみたときに、評価は様々であるというのが実態ではないでしょうか。誇りと愛着をもって「ふるさと意識」として浸透しているのでしょうか。

郷土史研究家塚田忠雄氏(本会副会長)は、春日井市とサボテンの歴史を調査研究する中で、この地域にどのようにして「サボテン」栽培が導入され、商業作物として創意と工夫の悪戦苦闘の末に地域特産の産業に育てられてきたのかを「伊藤サボテン園」所蔵の資料と聞き取り調査を基に歴史的経緯をまとめられました。氏が主宰される『郷土春日井研究』研究報 NO. 31, 32, 33(2011. 10)で発表されています。従来市民が目にしてきた資料は、春日井市商工観光課、春日井市観光協会が平成 6 年 5 月 1 日付発行「これが春日井の日本一サボテンの実生栽培全国シェア 80%」の資料のみで今日まで、これほど詳細に研究されたものはありませんでした。春日井市史にも、商工会議所の各資料にも所収されていません。

今回のフォーラムでは、「伊藤サボテン園」経営者である伊藤安季子氏に実生サボテン栽培の草創期を創り上げてきた義父伊藤龍二の革新的な創意工夫と悪戦苦闘振りを間近にし

てきた様子を Family History として語っていただきました。この貴重な歴史的証言が、何故「サボテンのまち春日井」なのかを塚田研究と合流することによって、説得力あるものにしたと思います。

そもそも、春日井でのサボテン栽培発祥の地「桃山町」は、明治 30 年頃から愛知県を代表する果樹栽培の発祥の地と言われてきました。荒無地を開拓し一大果樹栽培地の基礎を築いた人は、「関戸銀二」という人でした。桃山町県道高蔵寺小牧線沿いに「関戸銀二翁之碑」が建っています。碑陰に「翁は明治十九年一月小牧町西之島に生まれ少年時代より趣味と実益を伴う果樹園芸に関心を持ち大正十年果樹園経営の宿願を果たし、一大奮起して当地桃山に移住し荒無地を開墾し落葉果樹全般にわたって研鑽を積み、特に桃の栽培改善品種の育成に努め、又それまで不可能と言われていたリンゴの暖地栽培に着眼し、世人の嘲笑を浴びながら不屈の闘志で一大難事を解決し、この地域に果樹栽培の一新紀元を画したのである」とあります。撰文元愛知県農林技師恒川俊英、碑文我農生山崎延吉書となっています。



関戸銀二は病虫害被害、経済不況等幾多の危機を創意工夫で克服し地域の農業振興に功績を残した人でした。優れた農業改革者でした。消毒組合、果樹副業組合を組織し危機を克服しました。安城を「日本のデンマーク」と言われる一大農業地に築き上げた山崎延吉も評価する人物でした。

サボテンの実生栽培日本一にまで育て上げた伊藤龍次という人物が生まれた背景、土壌には、関戸銀二のような人物が活躍した地域の遺伝子のようなものを感じます。

果樹栽培を通じて育まれた農業への情熱と、バイタリティーが、伊藤龍次の創意工夫と悪戦苦闘によって「サボテン界に大革命をもたらした」と言われる園芸栽培農業に技術革新

関戸銀二翁碑（春日井市桃山町）をもたらしたことにより、今日地域の特色ある産業として存在していることが理解できます。

地域産業振興発展の条件は、その地域に企業家精神が発揮できる環境があることです。独創性、創造性を醸成することです。関戸銀二も伊藤龍次も危機を努力と才覚で乗り切りました。企業家精神は社会的に醸成されるものではありません。個々の経営者の危機意識によって呼び起こされるものです。歴史に学び、歴史を創ってきた先人の知恵に学ぶ中から、危機に対応する新たな方法（戦略・戦術）が出てくることを考えれば、今一度先人の知恵に学ばなければならないと強く感じました。行政も商工会議所も懸命に啓発活動、ブランド化推進活動を展開しておられ姿は見えるのですが、今一つ「春日井＝サボテン」のイメージ、臭いを感じさせるものはあまりないというのが実感ではないでしょうか。企業努力もさることながら、市民意識の醸成も重要なのではと思いました。（文責：河地 清）



次回

第 48 回

「ふるさと春日井学」研究フォーラムの ご案内

「ふるさと春日井」の魅力を再発見する FORUM

「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」

「地域活性化・まちづくりの応援メッセージ」

Forum for Furusato Kasugai Studies

Forum テーマ：

『ふるさと春日井の明治 10 年代「地域再生」』

—春日井郡の「俣約示談」と自力更生の経緯を中心に—

日 時：平成 29 年 1 月 8 日（日） 午後 1 時 3 0 分～3 時 3 0 分

場 所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）八幡小学校西側

TEL：0568-56-1943（〒486-0837 春日井市春見町 3 番地）

講 師：河地 清 氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長）

フォーラム内容：福沢諭吉の助力によって明治 12 年 2 月春日井郡地租改正騒擾が終息を
みました。しかし、足掛け 3 年にも及ぶ嘆願運動の結果、村落の疲弊は
深刻なものでした。林金兵衛を中心とする村落指導者は村落の再生に取
り掛からなければなりません。再び福沢の指導のもとで自力更生
に悪戦苦闘して行きます。・・・・・・後は FORUM で

（非会員の方のみ資料代 500 円徴収させていただきます。）

※事務局：〒486-0825 春日井市中央通り 2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索 